

「目覚めると片耳が聞えない」 …前触れもなく発症する突発性難聴 即座の受診が回復のカギ

女優の安西ひろこさん(47)は昨年12月、急に左耳が聞きづらくなりました。病院を受診すると「突発性難聴」と診断され、ステロイドの点滴治療を受けたものの、効果はなかったとSNSで報告しています。

突発性難聴は急に耳が聞こえなくなる原因不明の病気です。68歳男性Aさんは糖尿病で治療中です。1カ月前のある朝、目が覚めると左の耳が聞こえません。耳鳴りもあります。翌日も同じ症状が続き心配になり総合病院の耳鼻咽喉科を受診しました。

鼓膜は正常で、頭部CT検査でも異常はありません。聴力検査で左耳に70デシベルの感音難聴を認め、突発性難聴疑いで入院、ステロイド点滴を1週間受けました。

治療後、左耳の聴力は徐々に回復、耳鳴りも消失、わずかに左右差は残ったものの日常生活に支障はありません。

日本では65歳以上の人だけで、難聴の人が約1600万人いると推定されます。中高年で難聴になると、認知症を発症しやすくなります。難聴には、外傷などで鼓膜が破れるなど外耳や中耳に原因がある伝音難聴と、流行性耳下腺炎に伴う内耳炎や聴神経腫瘍のように内耳や脳に原因がある感音難聴があります。急性発症する感音難聴で、一番多いのが突発性難聴です。

突発性難聴はほとんどが片耳だけに起こり、まれに両耳が障害されます。10万人当たり毎年60人ほどが罹患（りかん）しており、近年増加しています。発症は男性にやや多く、発生率は年齢とともに高くなり、50～60代で最も多い疾患です。糖尿病や高血圧、高脂血症を患っている人や喫煙者に多いことが知られています。

■特効薬はなくステロイド治療

原因は不明で、これという誘因もなく発症します。ただ、経験的に睡眠不足、疲労やストレスの蓄積、多量の飲酒などが先行していることが多く、ウイルス感

染による風邪が先行することもあります。怖いのは突発性難聴になった人はその後、脳卒中を起こす確率が高いことです。

症状は突然発症する片耳の難聴です。耳がつまった感じがあり、8割の人が耳鳴りを訴え、3〜4割の人が浮動性や回転性のめまいを併発します。吐き気や嘔吐（おうと）を伴うこともあります。診断には標準純音聴力検査と造影CTかMRI検査が必要です。内耳や脳に腫瘍など、ほかの疾患がないことを確認し、3周波数で一定以上の難聴が確認できれば突発性難聴と診断されます。

治療の第一は安静です。特効薬はありません。内耳の炎症を抑え、血流を改善し、音を感知する細胞（有毛細胞）を保護するために副腎皮質ステロイドを経口、または点滴で全身投与します。これで効果がみられない場合、鼓室内に直接ステロイドを投与します。

聴力の予後は、元通りに回復する人が約4割。3分の1の人はある程度回復し、残りはまったく回復しません。治った後、まれに再発することがあります。片側でも難聴が残ると、騒々しい環境や会議など複雑な音響環境ではコミュニケーションがうまくとれず生活の質が落ちます。

予後不良になる要因としては、2週間以上の治療開始の遅れ、発症時に高度の難聴がある人、回転性めまいを伴う場合、高齢者、糖尿病の合併などがあります。突然耳が聞こえなくなったら、ただちに耳鼻咽喉科の専門医を受診しましょう。